

# 〈半人間〉の射程と限界

——大田洋子「半人間」論

村上陽子

## 一 「半人間」に対する評価をめぐって

大田洋子の随筆「生き残りの心理」（一九五二年一月）には、大田が「不安神経症」と診断されて東大病院の神経科に入院し、持続睡眠療法を受ける前後の状況が綴られている。「私は原爆投下の日からその後につづいた事件と現象と状況とを、いくつかの作品に書いた。今後はあの巨大な殺人のもたらした現象と状況とが、被爆したまま現在も生きている人間の心理を、どのようなものにしていくかを今後の作品に書きたい<sup>①</sup>」という思いに根ざし、大田の実体験に基づいて書かれた小説が「半人間」（『世界』一九五四年三月）であった。まずはその梗概をたどってみよう。

世間から「原爆作家」というレッテルを貼られている主人公の小田篤子は、原爆体験を小説に書くことの苦しみや朝鮮戦争勃発の恐れから逃れるために抗ヒスタミン剤の摂取量を増し、心身に不調をきたしていた。一九五二年七月、「不安神経症」と診断さ

れた篤子は持続睡眠療法を受けるために神経科に入院する。病室で篤子はさまざまな苦境を生きる女性たちの姿を目の当たりにする。持続睡眠を終えてなお本復に至っていない篤子は夜中に病棟をさまようなどしながら日々を送る。そして医師に、かねてから自殺願望のあった女中の竹乃が首吊りを試みて失敗したことを聞かされる。それを聞いて「みんなへん」だと吐き捨てる篤子を看護婦が散歩に連れ出し、二人が大きな満月を目にする場面で作品は幕を閉じる。

大田自身はこの作品について「批評家のあいだで、比較的問題になった「半人間」は作者の私に、線が細く、あまい感じで、あきたらず、小説以前だと評された「夕風の街と人」が骨身に沁みるように気に入っている<sup>②</sup>」と書いている。「半人間」は昭和二九年度平和文化賞を受賞し、第三一回芥川賞候補にもなった<sup>③</sup>。「半人間」は大田の戦後の作品の中では比較的批評家たちに好意的に受け止められたと言える。また、被爆者に限らず戦後社会の苦境を生きる人々の群像を描き出した「半人間」の手法は、後の

大作『夕風の街と人と』——一九五三年の実態』（大日本雄弁会講談社ミリオンブックス、一九五五年、以下『夕風の街と人と』）に引き継がれていった。

「半人間」に対する肯定的な評価にしばしば見られるのは、篤子の苦悩を、同時代を生きる人間に共通の問題として捉えるという視点である。『新日本文学』の書評では壺井栄の『岸打つ波』と「半人間」に共通する特徴として「平凡な人々の魂の傷を描くことによつて、そのようなさやかな生活をまで傷つけ歪めてしまふ時代の非人間性を浮彫りにするという方法」<sup>64</sup>が挙げられている。また、檜山久雄は結末が「文学的」な感傷に流れてしまったことを惜しみつつ、「篤子の置かれているような状態は、たとえ彼女の場合が原爆が決定した特殊な状況であろうと、現代のどの人間の状態にも多かれ少かれ置きかえることができる」<sup>65</sup>と評価した。

一方、「半人間」を作者の個人体験に根ざした私小説として捉える批評もある。小田切秀雄は「半人間」を「作者の「私」を中心として描き出す方法」を用いて「原爆被災の生理的・精神的な結果の一部」を描いた作品として評価した<sup>66</sup>。また、黒古一夫は「半人間」と『夕風の街と人と』を「原爆後遺症という桶を通して見た時、それぞれ反面ずつその役割を果たしている」作品として位置づけ、『半人間』は一人の被爆作家が被爆という地獄めぐりの体験によつて精神に異常をきたしたことを描き、『夕風の街と人と』では、十年近い年月を経ているにもかかわらず、広島市の基町スラムでは、未来に対して、展望もないまま生き永らえている被爆者集団の悲惨な現実を描いている」<sup>67</sup>と批評した。これ

も「半人間」を私小説として捉えたものだとと言える。小田切は私小説としての「半人間」に「文学的」な価値を見いだし、黒古は病に冒されつつ政治的主張を作品に盛り込んだ大田洋子という作家を高く評価した。

ジョン・W・トリートは私小説として「半人間」を読む読者の感覚に注目したという点において、従来の批評とは一線を画す読みを提示している。トリートは、狂気を帯びた篤子の知覚を読者が「疑わしく」感じるとし、「私たち（読者）は彼女（篤子）の苦境に対して同情するかもしれないが、それでも『屍の街』や『人間檻樓』よりも恐れを抱かない。というのは、問題——ヒロシマならびに人類の絶滅——は、歴史的なものというより、より個人的なもので、特異的なものであるとさえ見えるからである」<sup>68</sup>と論じている。トリートは私小説としての「半人間」が、作者である大田洋子自身の「錯乱した女性」イメージを強化する働きを担つてしまったという一面を浮かび上がらせた。

「半人間」では、原爆体験に加えて緊迫する時代状況そのものが篤子の精神を蝕んだことが明確にされている。戦争や戦後の苦境によつて心身の健康を損ない、未来への不安を抱く心理状態を「日本国民」に共通する問題として提示することが「半人間」の狙いのひとつであったことは疑いようがない。しかし「半人間」の普遍性や政治性を評価する批評は作品の中で展開される篤子自身の自己分析に拠るところが大きいため、治療によつて篤子の意識が朦朧としている箇所や、篤子が明確に言語化できない箇所を汲み取れていない。一方、私小説というジャンルに「半人間」を位置づけてしまうときには篤子の政治性や同時代状況への目配り

が欠けてしまう。

これらの問題点を踏まえて、本論では時代状況および篤子と周囲の人間との関係に着目していきたい。「半人間」は個人の心身に生じる病を同時代の普遍的な問題として提起しようとしながらもそれが成し遂げられずに終わる作品である。篤子の覚醒と混濁の意識の間には、自己の被傷性への強い自覚、他者の痛みへの共振、そこから引き裂かれていく感覚などが潜んでいる。それらをたどることで、「半人間」として生きることの可能性と限界を明らかにしていくことを試みる。

## 二 「不安神経症」と「一九五二年の現在」

「半人間」の冒頭、神経科への入院のために自動車を走らせる篤子は「一九五二年の現在、なににあざむかれているのかわからないが、あざむかれているという意識には、確かな手応えがあった」と述懐する。ここに刻印された時間、すなわち「一九五二年の現在」はこの作品において重要な意味を持っている。この「一九五二年の現在」に満ちる空気こそが篤子に自殺や発狂を警戒させ、生きがたさを感じさせるものなのだ。それゆえに、篤子がさらされている「一九五二年の現在」がいかなる時代であったのかを確認することからこの作品の考察を始めたい。

「半人間」の中でしばしば問題にされるものに、「朝鮮の休戦会談」と「戦争の準備の象徴」がある。一九五二年という年は、朝鮮戦争の休戦交渉の最中であり、片面講和によって日本の国際社会での位置づけが定まった年であった。

朝鮮戦争は一九五〇年六月二十五日、北朝鮮の南進攻撃開始によって勃発した。この事態を受けてアメリカは国連安全保障理事会を召集し、ソ連欠席の中で二五日に北朝鮮の侵略を決議、二七日には米海空軍、三〇日には地上軍の派遣を決定させた。そして七月七日には国連軍司令部が東京に設置され、米軍は「国連軍」となり、韓国軍がその指揮下に入った。国連軍司令官はマッカーサーが務め、朝鮮の爆撃に出撃する米空軍機は九州の板付や芦屋などの基地から飛び立っていた。日本は米軍と「国連軍」の出撃基地となったのである。朝鮮戦争の基地日本の防衛のため、マッカーサーの命令で日本政府は警察予備隊を創設した。戦況は当初は北朝鮮軍が優位だったが一九五〇年九月の仁川上陸作戦で戦局が逆転し「国連軍」は三八度線を越えて中国国境付近に北進する。しかし一〇月末には中国人民志願軍が介入したことで再び「国連軍」は押し返され、一九五一年春頃からは三八度線を挟んでの膠着状態が続き、七月より休戦交渉が開始された<sup>9)</sup>。

朝鮮半島で熱戦が展開されている間、日本は片面講和と日米安保体制への道を突き進み、一九五二年四月二八日、サンフランシスコ講和条約と日米行政協定の発効によって表向きの「独立」を手にした。冷戦構造が確立されつつある国際社会において日本が片面講和を受け入れ、アメリカを盟主とする西側陣営への参加を選択することは、必然的にソ連や中国、北朝鮮などの社会主義国との関係悪化を意味していた。それは国際社会において日本が自立した外交を展開する可能性を狭める選択でもあった<sup>10)</sup>。

篤子の言う「一九五二年の現在」は七月下旬、すなわちサンフランシスコ講和条約と日米行政協定が発効された三カ月後のこと

である。篤子はこの流れを「戦争の準備の象徴」と表現し、それを自分が抗ヒスタミン剤の注射をやめられないことの原因として医師に説明している。

「どういうときに、その注射をもつともたくさんざりたいですか」

篤子は答えにくかった。自分が女の患者だという意識があった。政治の問題にふれる言葉が咽喉につかえている。医師はおそらく女患者からそういう種類の返答をきこうとはしていないのだ。しかし言葉の応答による診察をうけているのである以上、相手の思惑を考えて、答えを誤簡化することは便利ではない。篤子は、日本のサンフランシスコにおける講和条約、日米安全保障条約、日米行政協定につづいて、破防法まで来た政策の進展を見ていて、これらの連鎖的に起ってくるものが、戦争の準備の象徴のように思い込まれ、一刻も醒めているのがいやになって、次第に睡眠剤と注射液がふえたのだということ、ぼつりぼつりと医者に云った。

「中立でいらつしやいますか」  
「はあ」

篤子はあいまいに答えた。

(二七〇頁) (11)

サンフランシスコ講和条約は、日米安保条約および行政協定と不可分の関係にあった。行政協定は、米軍が陸・海・空軍の基地を無制限に設定・維持できること、米軍属やその家族の治外法権、基地設定のための費用を日米共同とすることを定めた。また、破

防法と略称され、後に反基地運動を弾圧するための法的根拠として用いられることになる破壊活動防止法は一九五二年七月二日に公布されたのである。

篤子はこの流れを明確に捉えた上で、アメリカが「国連軍」として主権回復後も日本に居残り、朝鮮戦争が展開されていくことを極度に恐れていた。原爆の使用も匂わされ、核戦争の再来は杞憂とは言えぬ状況であった<sup>(12)</sup>。しかし医師は原爆や社会状況と篤子の症状を切り離して考えようとし、看護婦は「原子爆弾は、明日やあさつてはまだ落ちやしません」と言い放つ。だが、篤子が口にする不安は、そのようなかたちで朝鮮半島の戦況を他者の問題として捉えている「日本人」の「まとも」さを揺るがしていくものとして機能していると言えるだろう<sup>(13)</sup>。

「半人間」において、篤子はマルキシストの妻であるために周囲から敬遠され、「原爆作家」としてメディアに消費される。加えて被爆の記憶や健康への不安も常につきまとい、それらが篤子の「不安神経症」を誘発しているとされている。幾重にも折り重なる被傷性と密接に絡み合うことで、時代への警鐘を鳴らす篤子という主体は弱々しく立ち上げられていく。その弱々しさが篤子自身の加害性や他者への視点の欠落を覆い隠す、隠れ蓑のような役割を担っていることは否定できない。

たとえば日本が朝鮮戦争に加担している加害国家だという意識を篤子の言動から読み取るとは難しい。篤子は「新潟にも、飛行場ができ、基地ができしまった」という夢を見、飛行機の爆音にさらされて「軀中の骨が碎けるような」思いを味わう。だが、篤子はその飛行場から飛び立っていく兵士たちが繰り広げる朝鮮

半島での戦闘や、それを後方で支えて経済的利益を享受している日本という国家のあり方にはさほど関心を示していないのだ。

自らの加害性を問う視点の欠落は、作者である大田洋子が抱えている問題でもあった。江刺昭子は大田洋子の戦時中の言動や作品が「時局むき」であったことを指摘し、戦後の大田洋子が原爆を繰り返しテーマとしながらも自分自身を省みることがなかったと批判している。

「屍の街」などで、原爆被害を招いた戦争の責任を支配者に求め、支配者の煽動にのつた国民の好戦性に求めているものの、自分もその好戦的な国民の一人として、侵略地の民衆を苦しめたという反省は全くない。洋子がこれらの作品を書いた時点では、このような視点が一般にもほとんど獲得されていなかったのだから、洋子にそれを求めるのは酷かもしれない。しかし少なくとも、日本人の好戦性を批判するのなら、自身の戦時中の言動にもなんらかの形で触れるべきではなかったか。<sup>(14)</sup>

「一九五二年の現在」を「まとも」に生きることへの不信を表明する自らを問えていないことは、たしかにこの作品の弱さだと言えるだろう。だが大田洋子や作品の主人公である篤子が自分自身の加害性に目を向け、「反省」をすればよいということでもない。問われるべきは国家の責任であり、その国家の暴走に歯止めをかけることできなかった「日本人」一人ひとりの問題であるはずなのだ。

「半人間」において戦前、戦中の問題はたしかに置き去りにされている。しかし「一九五二年の現在」において着々と再軍備化を進める日米両政府のあり方を黙認することの問題がここでは問われようとしている。そしてそれは「半人間」という表象の射程とその宛先を見直していくことでより明確になるのではないかと思われる。

### 三 〈半人間〉という存在

この作品のタイトルとなっている〈半人間〉という言葉は、実は本文中にはあらわれない。そのため〈半人間〉がどのような存在を指すのかということは明確にされていない。しかし、しばしばこの言葉は不安定な精神状態を生きる篤子と、そして同じ病室に入院している女性たちを指す言葉として捉えられてきた。<sup>(15)</sup>

だが、「一九五二年の現在」に着目するとき〈半人間〉という存在はより広い射程を持つて立ち現れてくる。講和条約発効に伴う日本の主権回復は十全なものではなく、引き裂かれた国家という印象を人々に与えていた。ジョン・ダワーはこの問題にふれて、次のように述べている。

日米安保条約と、これに付随して作成された「行政協定」は、戦後合衆国が締結した二国間の取り決めのなかで最も不平等なものとなった。アメリカ人は他に例のない治外法権を引き続き手にし、アメリカが日本に要求した軍事施設は、誰の予想をもはるかに超えて法外な数にのぼった。「ニューヨーク・

タイムズ』紙の高名な軍事評論家であったハンソン・ポール  
ドウィンは、これは「日本が自由で、しかも自由でない時代」  
の始まりであると、ずばり指摘した。<sup>(16)</sup>

ダワーは講和発効後間もなくの世論調査で「日本は独立国家になつたかとの問いに「はい」と答えた者は四一%しかないなかつた」とも述べ、「日本人」がこの「従属的独立」によつてさまざまに引き裂かれていたことを指摘している。それはとりもなおさず、講和発効によつて回復された「主権」が分裂したものであつたことを意味している。

「半人間」の中では講和発効後、住民登録の用紙が来た時、篤子は女中の竹乃を相手に「冗談とも本気ともつかず」、「私は日本の住民でなくていい」、「橋の下に小屋を建てて無籍で暮らす」と語つていた。以下の会話は、それに続く部分である。

「私たちは二人の殺人者の手を見ながら、生きてるのよ。  
そのうえいつ自分で自分を殺してしまふかわかんない」

「その二人の殺人者は、両方とも破れん恥でございます」

「ねえ、こんど戦争に引きずりこまれれば、自殺者がどつと  
でるよ。気がいいも」 (二八二―二八三頁)

主権を引き裂かれ、戦争に引きずりこまれる「日本の住民」であることを放棄したいと願いながらも、アメリカと日本という「二人の殺人者」から逃れることができないという思いが篤子にはある。それは「一九五二年の現在」を生きる「日本人」に向けられ

た言葉であつた。

やがて病を深めていく篤子は逃れようのないさまざまな束縛に不信を突きつけることでそれから引き退いていこうとする。

そこからのがれる道のない、おのれの所屬する国家への不信、世界への不信、人間への不信、社会への不信。自分の肉体と精神のぶつかる接触体への不信が、あたまのなかを暗くしている。この不信は自己への不信を裏書きするものであつた。自分の確立が自信となつて血肉をつらぬいていけば、不信ながらも、その不信のよつてくるものに、抵抗して生きていなければならぬ必要を、かんじる筈であつた。不信をそのまま放つていようとするのは、病気がなおつていないからだと篤子は思つた。 (三二八頁)

ここで篤子の不信は「国家」、「世界」、「人間」、「社会」に向けられている。篤子はこれらの枠組みに身を委ね、自己を規定することができずにいるが、それから逃れる術も持たない。病によつて「国家」や「人間」への不信を保ち続けること、それがすなわち「半人間」であることだとすれば、「半人間」として生きることは「そこからのがれる道のない」強固な枠組みから引き退く身振りとして捉えることができる。

だが、篤子自身がすでに気づいてるように、「半人間」という存在は抵抗につながるものではなく、不信にうづくまり続けることを意味するものではない。さらに「半人間」として生きる限り、篤子が口にせずにはいられない不信はすべて「病氣」の癒

えていない者、すなわち「氣ちがい」の発言として回収され、病棟の中に閉じ込められてしまうという問題がある。だからこそ篤子はその後、「自分の確立が自信となつて血肉をつらぬいて」いる存在として再生する方向を指そうとする気配を見せる。

さまざまなかたちで分裂を体験していた「一九五二年の現在」を「まとも」に生きようとする「日本人」に向けられた（半人間）という表象は、自らの置かれた引き裂かれた状況への気付きを促し、「国家」や「人間」への不信を突きつける誘いでもあつたと、まずは言うことができるだろう。しかし（半人間）が抵抗の主体として積極的な可能性を持つものとはなり得ないという限界もすでにそこに織り込まれていたのである。

「国家」や「人間」に不信を抱き続ける（半人間）の限界について考えると、篤子と同じ病室に運び込まれてきた南千佐子という女性の存在が重要になってくる。千佐子は篤子とは異なるかたちで「国家」や「人間」への不信を表明する人物である。次節以降では、篤子と千佐子に着目し、アメリカと日本という「二人の殺人者」が彼女らをいかに引き裂いていったかについて考察していく。篤子と千佐子、二人の生を考察することを通して彼女たちの生に米軍——「一九五二年の現在」における「国連軍」——が与えた影響を見ていくと同時に、複数の存在として描かれた（半人間）のあり方を具体的に明らかにすることを試みていきたい。

#### 四 検閲とマルキシズム

「半人間」は一九五二年の夏、七月下旬の夕暮れで幕を開ける。

篤子は「この四、五カ月」の間「人と口をきくこともいやになり、顔を見られることさえ煩わしき」を感じるといふ「症状」を高じさせていた。篤子は自分が自殺するのではないかという不安と、それを避けたいという思いから神経科を受診した。八月が近付くと「原爆作家」として話を求められるという状況は、篤子の「症状」の悪化に拍車をかけていた。篤子の元には「四、五年前」、作品内の時間に置き直すと一九四七、四八年頃から全国から「原爆弾の話」をしてほしいという依頼が寄せられるようになったという。篤子には当初それに応じる意志があつたが、原爆の話をするのは篤子を深く苛んだ。また、「それ（原爆）」を落した相手へむかつて、非難と攻撃を浴びせなければならなかつたが、それをゆるさず、ふみにじる力がほかのところにあつた」という状況があり、篤子は講演の依頼を断るようになっていく。

篤子が原爆の話を求められるようになった時期は、プレスコードのまつた中であつた。GHQによる検閲は一九四五年九月から一九五二年四月の講和発効まで続いた。この間、原爆体験を書くことははっきり禁止されたわけではないものの、自主規制と検閲の二重の抑圧が常につきまとつていた。ジョン・ダワーは原爆をめぐる言説の検閲について次のように指摘している。

降伏後一、二年間は、広島周辺の地域刊行物を中心に、多くの作家が原爆についての散文や詩を発表している。しかし同時に、永井隆など被爆者の初期の著作が発禁処分になり、原爆に関連した文書の多くが大幅な削除を強いられた。一九四六年八月に雑誌『ニュー Yorker』に掲載されたジョン・ハー

シーの「ヒロシマ」は、このテーマをあつかつたもつとも感動的な英語の作品であった。この短編は、六人の被爆者を素描して読む者に深い印象を残したが、日本では、メディアでこそとりあげられたが、翻訳で読むには一九四九年まで待たなければならなかった。原爆体験はタブーだと口から口へと伝わった結果、直接の検閲と広範な自主規制とが結びついて、この関連の著作はほとんど完全に姿を消した。それでも一九四八年末になると、永井隆の本が出版され、原爆文学がようやくおさおさ登場することになった。このような状況では、原爆を生き延びた人たちが、互いに手をさしのべて支えあったり、核戦争が個人のレベルでどのような意味をもつのかを他の人に語ったりすることはきわめてむずかしかった。<sup>(47)</sup>

ダワーが言及している「永井隆の本」とは、当時ベストセラーとなつた『長崎の鐘』（日比谷出版、一九四九年）である。永井はカトリック信者としての立場から、浦上の原爆死者を「世界大戦争という人類の罪悪の償いとして、日本唯一の聖地浦上が犠牲の祭壇に屠られ燃やさるべき潔き羔として選ばれた」と位置づけ、この犠牲が「天皇陛下に天啓を垂れ、終戦の聖断を下させ給うた」とした<sup>(48)</sup>。これは原爆の使用によつて終戦がもたらされたという一つの「神話」の形成に大きく寄与した言説であつた。篤子が講演依頼を受け始めた時期は、「神話」を受け入れることで原爆を語るものがかるうじて許されるという状況であり、「それを落した相手」への「非難と攻撃」を公然と口にすることは極めて困難

だつたと言つてよい。原爆を体験し、戦後「原爆作家」と名指されながら作品を発表し、発言してきた篤子は自主規制を余儀なくされ、周囲の監視の目とせめぎ合いながら言葉を紡がなければならなかった。それらは強い抑圧として篤子を脅かしていった。

いま一つ、篤子を脅かすものにマルキシズムへの警戒があつた。入院中、篤子はしばしば医師から自分や夫の政治的立場を問われる。篤子の夫はマルキシストで、それは周囲が知るところであつた。篤子は医師の問いに対して「はあ」という曖昧な返事をするのである。

政治的立場を曖昧ながらも「中立」に設定しなければならぬ背景には、この時期の共産党の位置づけの問題があつた。道場親信は、朝鮮戦争が勃発と同時に全面講和と朝鮮戦争反対を訴えていた共産党が事実上「非合法」状態に置かれたと指摘している<sup>(49)</sup>。

この問題は篤子が持続睡眠療法のために混濁した意識の中で、知り合いの「原爆娘」<sup>(50)</sup>に会いに行こうとして夜中の病棟をさまよい歩く場面でも、より深刻にあらわれている。「原爆娘」たちは整形手術のために上京していたが、引率の牧師がマルキシストを夫に持つ篤子を警戒し、篤子に会いたがっていた娘を引きとめたのだという。

「原爆娘」たちは実際に一九五二年六月に上京し、東大分院で治療を受けている<sup>(51)</sup>。このとき「原爆娘」たちを引率していたのは広島メソジスト教会牧師の谷本清であつた。ジョン・ハーシー『ヒロシマ』の翻訳者でもある谷本の被爆体験は、同書で大きく取り上げられている。谷本は教会再建の資金集めのため、メソジスト教会外国伝道局からの招待によつて一九四八年から一九五〇

年にかけてアメリカで講演旅行を行った。帰国後、谷本はケロイドを負った女性たちのための聖書教室をひらき、来広した著名人に彼女たちの治療の必要性を訴えていった。一九五二年、東大病院での治療が実現したことをきっかけに「原爆娘」の存在は広く知られ、一九五五年には米ジャーナリストのノーマン・カズンズらの協力によって女性たちの渡米治療が実現した。この動きに関して当時から広島ではなぜ女性たちだけなのか、谷本の売名ではないのかという批判も少なくなかった<sup>(22)</sup>。早くからアメリカと積極的に交流し、その支援を期待していた谷本にとってマルキシストとの関わりは極力避けたいものであったのである。

そのような位相を踏まえた上で、篤子は「原爆娘」が政治的に無色で無力な存在として表象され、メディアや政治に利用されることへの憤りを混沌とした意識の底で打ち出す<sup>(23)</sup>。篤子は牧師に対して憤り、なだめようとした看護婦をも「牧師」と名指す。

「真夜中の廊下で泣いてても、しかたないでしょ。ねえ、ベッドに帰りましょう」

牧屋が肩に手をかけた。

「牧師のくせに」

篤子は牧屋の手をとった。

「私はあの娘一人のためにも、たたかうつもりなの。でも顔を見るのがこわくて、行けなかったのよ。毎晩、寝床のなかで、何時間も泣いていたの」

眠りをさまたげられる牧屋は、眉をよせて怒った表情をしていた。

「自分の娘でもないひとのことを、そんなに気にすることないじゃ、ありませんか。そんなことで、じぶんのからだまで壊すなんて、つまらないことだわ」

「——つまらないの？ あんたも牧師だわ」(三二—三三頁)

篤子の政治的立場を警戒したために「原爆娘」を篤子に近づけまいとする「牧師」とは異なり、ここで「牧師」と名指される付き添い看護婦はより単純な論理で「原爆娘」のために涙を流す篤子を突き放す。「自分の娘でもないひとのことを、そんなに気にすることない」という一言がそれである。このとき「原爆娘」は篤子が嘆く資格のない他者として措定され、篤子から遠ざけられてしまう。付き添い看護婦の論理では、「自分の娘」や「じぶんのからだ」がまず重要で、他者のことを気に病むのは「ばからしい」ことなのである。このようにして他者への回路を閉ざすことは、朝鮮戦争下の半島への想像力を押し殺し、再軍備の危険に目を閉じて「一九五二年の現在」を生き延びようとする「まとも」な人々の問題を浮き彫りにするものである。

一方、篤子は「あの娘一人のためにも、たたかう」ことを決意しつつもそれをなしえない。そのときに篤子にできることは泣くことだった。これは篤子がかつて女中の竹乃に「自分のためにだけの涙をながさない」、「自分以外の人のために、涙をながさなくちゃいられない」と語っていたことにつながる。篤子にとって他者のために涙をながすことは、他者の痛みと共に振する回路を閉じないための行為にほかならない。だが「原爆娘」は政治的に無色な主体であることを要請され、無垢なるまっつき被害者として表

象されていった。この篤子の涙もまた、彼女らを自分ではたたかうことのできない無力な存在に留め置き、他者化していくまなざしと無縁ではない。だが、そのような危険をはらみながらも他者の痛みに共振するための回路がここではまだ細くつながれていることを確認しておきたい。

以上のように、篤子はアメリカと日本という「二人の殺人者」が招いた原爆投下という出来事生き延び、その体験と記憶に蝕まれ、言説や政治的立場への抑圧を感じて日々を過ごしていた。そして千佐子は篤子とは異なるかたちでの引き裂かれた生を生きている。

## 五 〈半人間〉の限界

篤子の病室には婚約者に裏切られたと思ひ込んでいる「分裂症」の娘や、新興宗教にのめり込んでいる女性が入院している。しかし篤子は彼女らと言葉を交わすことがなく、付き添い看護婦や女中を介して彼女らの境遇を知らされるのみである。それに対して千佐子は医師に自白剤のイソミタールを注射されて篤子の隣のベッドで身の上を語り始め、篤子はそれをすべて聞いてしまうのである。

千佐子は一九四六年に引き揚げてきた後、生活のために池袋駅の焼け跡で米兵相手の売春を始めた。やがて妊娠した千佐子は「黒い赤ん坊」を出産する。「白人の子供のつもりでいたのに、見ているうちに黒くなってきたので、私、少し気が変になりました」と千佐子は語っている。乳が出なかつたために「黒い赤ん坊」は

亡くなり、千佐子はいったん持ち直していたのに、最近になってまた「白い人でも黒い人でも、外国の人さえ見ると、ほんとの大きさよりもっともっと、ばかにかさばって見えて、ナイフもつていたら、突きさしたくなつちやつた」という状態に陥っているのだという。千佐子は自分が人を殺すのではないかと恐れ、睡眠剤を飲んで日暮里の線路に寝ていて病院に担ぎ込まれてきた。千佐子は少し回復してから、篤子と次のような会話を交わしている。

「いのちを惜しむということだけでも、こっけいなことね、現代では」

篤子は独りごとを云った。

「わたしは自分が死ぬことよりも、人をころしそうで、それがこわいの。あなた、ころしたくないの？ 原子爆弾をつかつたやつ」

「――」

「わたし、赤ん坊がだんだん黒くなったとき、あたまがへんになったでしょ。そのときはX病院にいれられていたの。あそこにはひどいひとがたくさんいましたわ。外国兵にもらつた悪い病気で、完全にくるつたのがいたの。それがとつても美しいひとでね、よけい惨めに見えたわ。なんでも気にくわないことがあるとね、ところかまわず、おしっこやうんこしちゃうんですよ。その人を見てると、わたし、どうしても日本人以外の人をころしたくてころしたくて」

篤子は「独りごと」をつぶやいたり沈黙したりと、千佐子の言葉に対して正面から応答しようとはしていない。千佐子の言葉は、篤子の考えや言葉と響き合う可能性を含みながらも微妙なずれを生じさせている。それゆえに篤子と千佐子はお互いに結び合うことなく、すれちがっていく。

千佐子は「あたまがへんになった」ために収容された病院で自分と似た境遇にある「ひどいひと」を多く目にし、自分が体験したことやその痛みを個人に回せず「日本人」という集団に拡大して捉える視点を獲得していく。千佐子は、引き揚げや売春、混血児の出生という出来事を「日本人」全体の問題として捉えているのである。「白人の子供」だと思つて産んだ子が「黒い赤ん坊」であつたことで「あたまがへんになった」という千佐子の告白からは、占領軍の中に存在した人種差別意識が占領下の日本人にも共有されていることが伺える。しかし黒人兵を白人兵の下位に位置づける意識は「あたまがへんになった」千佐子からは抜け落ち、千佐子は白人兵も黒人兵も「おんなじ」だと言つて外国兵すべてにその殺意を向けていく。占領者の内部の差異やそこに存在する差別の問題をいつたん埒外に置き、外国兵をみな「おんなじ」他者的・支配的な存在として捉えるとき、逆説的に立ち上がつてくるのは被害者としての「日本人」だと言える。千佐子のいう「日本人」は売春によつて生計を立てる人々の悲惨な生の影を帯びた、女性的・被害者の存在として措定されていると言えるだろう。

次に、千佐子は「日本人以外の人をころしたくて」という状態に陥つた動機として、「惨め」な状態に突き落とされた別の女性の姿を見たことを挙げている。これは、篤子が自らの原爆の記憶

に苛まれて精神を病んでいく一方、「原爆娘」の悲惨さやその存在を語ることを通して「たたかう」主体として再生していこうとする姿を想起させる言葉である。千佐子と篤子は「自分のためだけ」に泣き、殺そうとしているわけではなく、むしろ自分たちと似通つた痛みを生きている「人のため」に何事かを成そうとしている。

だが、篤子のたたかいが泣き伏すことに留まっていたように、千佐子の殺人も未発の可能性として留め置かれる。それどころか、千佐子は自分が「人をころしそう」になることを極度に恐れ、その暴力性を自分自身に向けて自殺未遂をし、この病室に運ばれてきているのだ。千佐子もまた、外国兵や自分自身という「人間」に不信を抱き続ける（半人間）的存在の一人ではあるが、篤子がそこから逃れようとしつつも束縛を感じ続けた「日本人」という枠組みに、千佐子は疑いなく自分自身を組み込んでいる。千佐子によつて「日本人」は被傷性をまとうことを許され、千佐子が自らに暴力の矛先を向けることで加害者となることを免れているのである。

「一九五二年の現在」という時間の中で、神経科の病棟を中心に展開される「半人間」は、戦争の記憶やジェンダーや階層に伴う被傷性、引き裂かれた主権の問題を改めて呈示するものであつた。しかし篤子や千佐子によつて体現される（半人間）という存在はそのような問題を引き出して見せる一方で、最も弱い立場にある「被爆者」や虐げられた女性たちを「まとも」な「日本人」と区別し、排除すると同時に、彼ら彼女らの痛みや被傷性を戦後日本という国家や「日本人」が都合良く搾取していく言説に加担

しかねないものでもある。

「半人間」における（半人間）的な存在は、国家的な暴力に翻弄され、「まとも」であり続けることができない状況の中で弱々しく「人間」への不信を突きつける人々であった。しかし（半人間）は（半人間）であるがゆえにその声を聞き捨てられ、個としての力を持たず、狂気や自殺未遂によって表舞台から引き退き、「一九五二年の現在」からその姿を隠されていくのである。このような構図の中で（半人間）的な生に留まることは社会的・肉体的な死の気配を常にまとりつかせ、他者と結び合うことを許さない状況を生きることを意味する。決して主体たり得なかつた（半人間）の重層的な声に着目するとき、傷つき、損なわれた人々の生を踏みつけることによつて立ち上げられた戦後日本、そして戦後日本に影響を与え続けるアメリカの暴力性が透けて見えるのである。

## 注

- 1 大田洋子「生き残りの心理」、『大田洋子集』第二巻、三一書房、一九八二年、三一―四頁。
- 2 大田洋子「文学のおそろしさ」、『大田洋子集』第二巻、三三―三二頁。
- 3 第三十一回芥川賞（一九五四年上半期）は吉行淳之介が受賞している。選評で大田に触れているのは石川達三、宇野浩二、川端康成の三名である。石川は「大田洋子氏が候補にのぼっていたが、もはや新人ではない堂堂たる作家であるという意味から除外された。落選ではない。落選と思われては気の毒だから付記しておく」と述べ、宇野は「私は、作者がこういう小説を書くこととしたことは大へん結

構であると思うが、肝心の書き方があまり旨くないのを残念に思つた」と論じた。川端は「残念ながら、今回も私は特に推したい作品は見出せなかつた。（大田洋子氏の「半人間」は別である）」という言葉を残している（選後評、『文藝春秋』一九五四年九月）。

- 4 服部達、奥野健男、日野啓「小説世界の現情」、『新日本文学』一九五四年九月。
- 5 檜山久雄「大田洋子著『半人間』」、『近代文学』一九五四年十月。
- 6 小田切秀雄「原子力と文学」、『原子力と文学』大日本雄弁会講談社、一九五五年、一九〇頁。
- 7 黒古一夫「原爆とことば 原民喜から林京子まで」三一書房、一九八三年、四七―四八頁。
- 8 ジョン・W・トリート「大田洋子と語り手の位置」、『グラウンド・ゼロを書く——日本文学と原爆』水島裕雅、成定薫、野坂昭雄監訳、法政大学出版社、二〇一〇年、三〇九頁。
- 9 和田春樹『朝鮮戦争』岩波書店、一九九五年、三四二―三四六頁参照。
- 10 道場親信「占領と平和（戦後）」という経験』青土社、二〇〇五年、三〇六頁参照。
- 11 以下、「半人間」の引用はすべて『大田洋子集』第一巻（三二書房、一九八二年）に拠り、引用の末尾に頁数を付す。
- 12 「現実には原爆が使用されることはなかつたが、五〇年一月三日〇日には米トルーマン大統領が「朝鮮戦争で原爆使用も辞せず」と発言し、またマッカーサーが原爆の使用を求めると、原爆を現実使用する動きはたしかに存在したのである」（前掲、道場親信『占領と平和（戦後）』という経験』二九五頁）。

13 以下に引くように、大田洋子は隨筆でより直接的に怒りを表明している。「八月六日の被爆の刹那は、痴呆状態になにもかんじなかつた。東大神経科の医師は、あの刹那的な痴呆の状態を、ちゃんと『情緒麻痺』という専門語で説明していた。その情緒麻痺こそ、当時の広島市民を発狂させることなく漠として救い、八年後のこんにち、発狂や自殺を懸念させる心理の自覚に突き落している。／＼いい作家であつた原真喜はそのために自殺した。平凡な医師たちは、そのことでも戦争の惨禍にはふれず、もっぱら不安神経症の病名をつけている」(前掲「生き残りの心理」)。

14 江刺昭子「大田洋子論」、『国文学 解釈と鑑賞』一九八五年八月。

15 例えば佐多稲子、長岡弘芳、川村孝則の間で以下のようなやり取りが見られる。「佐多(中略)この『半人間』にしても、ああいう病院に入るような精神状態になつていながら、しかしあの病院の中の人間をよく見てますね。作品に見る作家としての彼女はちつとも病人じゃありませんよ。だから、むしろいろいろと伝わつていた彼女の実生活のほうがよほど病的なんです。それはちよつと面白いですね。／＼『半人間』は、シチュエーションがよく出来てますね。出てくるのがみんな(半人間)でしょ。直接戦争や原爆でそうなつたわけでは、必ずしもないけれども、そうであつてもおかしくない。そこは一種、戦後日本の社会の、歪みの縮図のようでもある。そしてそういう周囲がみんなこわれているなかにいると、どこかホツとするものが、彼女にはあつたみたいですね」、佐多稲子、聞きて・長岡弘芳、川村孝則「解説」、前掲『大田洋子集』第一巻、三四一頁。

16 ジョン・ダワー『増補版 敗北を抱きしめて(下)』三浦陽一、高

杉忠明、田代泰子訳、岩波書店、二〇〇四年、三七八頁。

17 前掲、ジョン・ダワー『増補版 敗北を抱きしめて(下)』一九〇頁。

18 永井隆「長崎の鐘」サンパウロ、一九九五年、一四五―一四六頁。なお、永井の理論はその後、山田かん、井上ひさし、高橋真司らによつて批判されることになる。篠崎美生子は「温存される(浦上燐祭説)——原爆死の意味づけと戦後天皇制をめぐって」(『社会文学』第三八号、二〇一三年七月)で、これらの論者の批判に「信仰上の価値を担保する用心深さ」が潜むことを指摘し、永井の(浦上燐祭説)が「キリスト教の根本的な思想に抵触する形で成立している」ことを示した上で、キリスト者の「戦後協力」に言及している。

19 前掲、道場親信『占領と平和 (戦後)』という経験』、二九四頁。

20 重いケロイドを負つた若い女性たちは、広島牧師谷本清や作家の真杉静枝らの尽力によつて一九五二年に東大病院で治療を受け、広く世に知られた。谷本牧師はその後、米ジャーナリストのノーマン・カズンズと協力し、未婚の被爆女性の渡米治療を実現させた。広島平和記念資料館では、当事者からの申し入れによつて二〇〇四年から「原爆乙女」の表記を「被爆した若い女性たち」という表現に改めている。(高雄きくえ「原爆乙女」とジェンダー——なにが彼女たちに渡米治療を決意させたのか、『女性史学』第二〇号、二〇一〇年参照)。

21 大田洋子は「広島から来た娘たち」(『世界』、一九五二年八月)と題された隨筆の中で一人の「原爆娘」との交流を描き、上京した彼女たちが巣鴨刑務所にA級戦犯の慰問に行つたことにも批判的に触

れている。

22 ジョン・ハーシー『ヒロシマ〔増補版〕』石川欣一、谷本清、明田川融訳、法政大学出版局、二〇〇三年。

23 米山リサは戦後日本の「女性化された記憶」について、「乙女」と「母」のイメージが主に対米関係において果たした役割を次のように論じている。「一方で、いわゆる「ヒロシマ乙女」たちは、日本と合衆国のオイディプス的関係を反映するイメージを構築していた。純潔、処女、娘らしさ、といったこの女性たちの支配的イメージは、少なくとも通俗的言説の中では、父親としてのアメリカとの関係における国民の姿を忠実に表象した。他方、平和と反核言説の主要な

担い手であった「広島島の母たち」は、アメリカの軍国主義と帝国主義と真向から対立するものを意味するようになった。彼女たちの語りは、反植民地闘争のメタファーを通じて、戦後の合衆国と日本の関係を表した。乙女たちが、米国と日本の公的な同盟と友愛を示唆していたのに対し、母性をめぐる修辭は、国民性についての別な語り、つまり、日本を合衆国の犠牲者として想起する語りを強固にする一助となったのである（米山リサ『広島 記憶のポリテクス』小沢弘明、小澤祥子、小田島勝浩訳、岩波書店、二〇〇五年、二七二頁）。